

## 選挙結果から見た中米における民主化の現状と見通し エルサルバドル、グアテマラ、ニカラグアの最近の政治情勢

著者	田中 高
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	17
号	1
ページ	16-23
発行年	2000-05-20
出版者	日本貿易振興会アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00006199">http://hdl.handle.net/2344/00006199</a>

## 選挙結果から見た

# 中米における民主化の現状と見通し

## エルサルバドル、グアテマラ、ニカラグアの最近の政治情勢

田中 高

### はじめに

ラテンアメリカでは1980年代、多くの国で民政への移管が実現した。本稿で取り上げるエルサルバドル、グアテマラ、ニカラグアの中米3カ国は、この時期に内戦下にあり、未曾有の混乱状態に置かれていた。したがって国際社会は、87年に中米和平合意が成立した後の、一連の民主化の動き、特に選挙の実施に注目してきた。確かに自由かつ公正な選挙という手続き上の民主化にはほぼ成功した。しかし長年にわたって軍事政権あるいは独裁者によって支配されてきた(コスタリカを除く)中米諸国で、現状のままではたして代議制民主主義は定着したといえるのか。本稿は3カ国の最近の選挙結果と政治情勢を検討しながら、この問いへのヒントを提供することを目指すことにしたい。

そこでまず行論の上から、民主化の意義について、『ジャーナル・オブ・デモクラシー』(*Journal of Democracy*)誌上で展開されたオドーネルとガンサー(共著者としてディアマンドロスとプール。以下ガンサーと略)の論争を例に、民主化あるいは民主主義の定義

を巡る議論を簡単に紹介し、その後各国の選挙結果と政治情勢を検討することにしたい\*1。

\*1 以下この論争については、O'Donnell, Guillermo, "Illusions about Consolidation," *Journal of Democracy*, Vol.7, No.2, April 1996, pp. 34-51; Linz, Juan J. and Stepan Alfredo, "Toward Consolidated Democracies," *Ibid.*, pp.14-33; Gunther, Richard, P. Nikiforos Diamandouros, and Hans-Jurgen Puhle, "O'Donnell's 'Illusions': A Rejoinder," *Ibid.*, Vol.7, No.4, October 1996, pp.151-159; O'Donnell, Guillermo, "Illusions and Conceptual Flaws," *Ibid.*, Vol.7, No.4, October 1996, pp.160-168を参照。

### 1 民主化を巡る論争

論争の概要は次のようである。権威主義研究の第一人者であるオドーネルは、議論を整理するために、まずポリアーキー(民主主義)についてのダール(Robert A. Dahl)の定義、(1)選挙によって選出された議員、(2)自由かつ公正な選挙、(3)包括的な参政権、(4)立候補権、(5)表現の自由、(6)広範な情報を選択肢、(7)集団としての自律性、の諸点を紹介する。オドーネルによればラテンアメリカではほ

ばすべての国で、「選挙実施の制度化」は達成されている。換言すると民主主義の手続き上の要件は満たしている。でははたしてそれが欧米型(Northwest)の民主体制と同質のものなのか。彼はそれは「幻想」であると喝破する。オドーネルの主張の要点は、ラテンアメリカが権威主義体制から民政に移管するプロセスでは、権威主義を突き崩す理念型として、欧米の民主主義が目標とされた。しかし現実に具象化したのは、似て非なるものである、ということである。オドーネルの議論は、権威主義の次に出現したラテンアメリカの現実の政治体制に、新しい概念規定を加えようとする知的営為に他ならない。

オドーネルの主張に反論したのは、南ヨーロッパ(スペイン、ポルトガル、ギリシャ)の民政移管を研究しているガンサーたちであった。彼らは、そもそも民主主義の定着(democratic consolidation)を「選挙実施の制度化」と同一視すること自体が誤りであるとする。なぜなら歴史的にも多くの国で、選挙が自由かつ公正に実施されても、クライエンテリズム(恩顧主義)が併存しているからである。ガンサーたちは例えば、民主化を考える上で、社会において政治的に動員されたセクターや組織化されたグループとその指導者などに注目すべきであるとする。

上の議論は中米の民政移管のプロセスを考察する際に、重要な視点を提供している。確かに中米では、以前にはなかった透明な選挙が実施されるようにはなった。エルサルバドル、ニカラグア、グアテマラで実施された1990年、94年、99年の総選挙には、国連の大規模な選挙監視団が組織され、国際社会はかなり突っ込んだ検証をしている。筆者自身日本政府派遣の選挙監視員として、これらの選挙に立ち会い、限られた範囲ではあるが現場の様子は確認している\*2。紙幅の関係で詳細は省

くが、ロジスティック面などで改善すべき問題は多いものの、ともかく選挙自体はおおむね自由かつ公正に実施されている。組織的な不正は起きていない。しかしそのことが民主主義の定着と結びつくかどうかは、はなはだ疑問である。

本稿では主たるテーマから離れるのであまり触れないが、筆者は中米における民主主義の定着には、政治レベルの議論と同様に、経済レベルの考察が不可欠であると考えている。1980年代後半以後、本稿で述べる3カ国ではいずれも、貧困層の割合は増加した。国連の人間開発指標をみても、どの国も下位グループに属している\*3。経済発展とデモクラシーの相関関係を巡っては、数多くの研究がある\*4。中米の政治動向が不安定で、民主主義がいまだ十分には機能していない背景には、この地域の経済発展が遅れ、富の偏在を持つ社会構造のあることを、あらかじめ念頭に置く必要があるだろう。

\*2 現地の様子については、それぞれ拙稿「1990年ニカラグア総選挙」(『ラテンアメリカ・レポート』Vol.7 No.2 1990年6月)29ページ；「1994年エルサルバドル総選挙：国連エルサルバドル選挙監視団日本派遣隊の報告」(『ラテンアメリカ時報』Vol.37 No.5 1994年5月)7～10ページ；「グアテマラ大統領選と中米紛争の終焉」(『中日新聞』[夕刊]2000年2月3日)。

\*3 United Nations Development Programme (UNDP), *Human Development Report 1998*, New York, Oxford University Press, 1998, pp.20-21.

\*4 最近の研究動向を簡潔にまとめたものとして、南亮進「デモクラシーと民主主義——理論と日本の経験——」(南亮進・中村政則・西沢保編『デモクラシーの崩壊と再生——学際的接近——』日本経済評論社 1998年)4～27ページ。

## 2 エルサルバドルの現状

エルサルバドル内戦が勃発したのは1979年であ

中米における選挙実施状況

(1982年から2000年)

1982年 3月	(グ)大統領・国会議員 (エ)制憲議会
1984年 3月	(エ)大統領(第一回)
5月	(エ)大統領(決選)
6月	(グ)制憲議会
11月	(ニ)大統領・国会議員
1985年 3月	(エ)国会議員・地方首長
11月	(グ)大統領・国会議員
12月	(グ)大統領(決選)
1988年 3月	(エ)国会議員・地方首長
4月	(グ)市長
1989年 3月	(エ)大統領
1990年 2月	(ニ)大統領・国会議員・地方議会
11月	(グ)大統領(第一回)
1991年 1月	(グ)大統領(決選)
3月	(エ)国会議員・地方首長
1993年 5月	(グ)市長
1994年 3月	(エ)大統領・国会議員・地方首長
4月	(エ)大統領(決選)
8月	(グ)国会議員
1995年 11月	(グ)大統領・国会議員
1996年 1月	(グ)大統領(決選)
10月	(ニ)大統領・国会議員・地方議会
1997年 3月	(エ)国会議員・地方首長
1999年 3月	(エ)大統領
11月	(グ)大統領・国会議員・市長
12月	(グ)大統領(決選)
2000年 3月	(エ)国会議員・地方首長

(エ): エルサルバドル (グ): グアテマラ (ニ): ニカラグア

筆者作成。

る。そして92年に政府と左派ゲリラ組織ファラブンド・マルティ民族解放戦線(FMLN)の間で和平合意が成立した。以下述べるように、近年のエルサルバドルの政治情勢の特徴は、国民共和同盟(ARENA)政権の定着化、FMLNの善戦、中間政党であるPDCの退潮の3点にあるといえよう。

まず大統領選挙の軌跡を振り返っておくことにしたい。1984年の大統領選挙には、サンサルバド

中米3カ国の国会議員党派別議席数

(上位3政党、年号は最新の選挙実施日)

国・党	議席数
<b>エルサルバドル</b> (総議席数84; 2000年3月選挙)	
ファラブンド・マルティ	
民族解放戦線(FMLN)	31
国民共和同盟(ARENA)	29
国民協和党(PCN)	14
<b>グアテマラ</b> (総議席数113; 1999年11月選挙)	
グアテマラ共和戦線(FRG)	65
国民進歩党(PAN)	36
新国家同盟(ANN)	8
<b>ニカラグア</b> (総議席数93; 1996年10月選挙)	
立憲民主党(PLC)	38
サンディニスタ民族解放戦線(FMLN)	36
ニカラグアキリスト教の道(PCCN)	4

筆者作成。

ル市長を三期務め、政党政治家として著名だったキリスト教民主党(PDC)のホセ・ナポレオン・ドゥアルテと、ARENAの創設者で元陸軍少佐のロベルト・ダウイソンの一騎打ちとなった。PDCは60年に創立された、エルサルバドルでは最も古い歴史をもつ政治政党である。ARENAは81年、もっぱら富裕層の既得権を守るのが目的で設立された政党で、当初は「極右」団体と形容された。84年選挙は決選投票に持ち込まれた末、ドゥアルテの農地改革、銀行国営化、外国貿易の国家管理など構造改革路線を支持し、ダウイソンを「狂信的な右翼と睨んだ米国の態度も大きく影響して、10万票の差をつけて前者が当選した。

1989年選挙は、ARENAのアルフレド・クリステイアーニとPDCのフィデル・チャベス＝メナの一騎打ちとなった。PDCは大統領候補選出を巡る内部対立(同党の内部抗争は以前から根強いものがある。

84年選挙では、ドゥアルテとチャベス＝メナが大統領候補指名で競合し、前者が党内投票で1票差で競り勝った)でイメージが大きく低下した。この選挙後、PDCは文字どおり坂道を転げ落ちるように、力を失った。対照的にARENAはこれ以後連続三期にわたって政権を獲得した。なぜARENAは長期間政権を維持できたのか。中間政党であるPDCが著しく党勢を失ったのはどうしてか。この疑問に答えるには、次に見るように、FMLNの選挙参加というエポックメイキングな出来事に触れておく必要がある。

1992年1月、クリスティアーニ大統領とFMLNは和平合意に署名した\*5。94年の総選挙は内戦終結後最初の選挙であること、任期がそれぞれ5年と3年の大統領、国会議員・地方首長選挙が重なる年で、「世紀の選挙」として内外の関心を集めた。特に国連が積極的に関与し、国連エルサルバドル監視団(ONUSAL)を中心に、大規模な選挙監視活動を展開した。自由かつ公正な選挙の実施は、手続き民主主義の不可欠の要素である。FMLNのゲリラメンバーは銃を捨てて、投票箱の戦いに賭けた。その意味で94年選挙は、この国の大きな転換点であった。

この時ARENAの大統領候補は前サンサルバドル市長のアルマンド・カルデロン・ソル、FMLNは二つの小さな左派政党(民主連合=CD、国民革命運動=MNR)と連合し、ルベン・サモラを候補に擁立した。第一回投票の得票率はそれぞれ49.0%、24.9%で(ちなみにPDCは16.4%)、いずれの候補も過半数の得票に達せず、決選投票に持ち込まれた。決選投票ではARENAが68.4%で圧勝し、FMLN=CD=MNRは31.7%に留まった。

FMLNが軍事政権、内戦時代を通して非合法であったことを考慮すると、同党はかなりの善戦である。しかし決選では大きく水を開けられた。

1999年3月の大統領選挙では、ARENA党内では傍流にあった弱冠39歳のフランシスコ・フロレス・ペレス候補が、FMLN古参メンバーのファクンド・グアルダードに得票率20%以上の差をつけて圧勝した。現在ARENA内部ではフロレス現大統領と、党の事実上の最高実力者であるクリスティアーニ元大統領の間の権力争いが顕在化している。

選挙戦を報じたマスコミの多くは、FMLNがグアルダードを大統領候補に決定した時点で、フロレス候補の当選を予想していた。かなりの数の国民にとっては、ゲリラ指揮官としての彼の名前は暗い内戦時代を思い起こすもので、求心力に欠けた。FMLNに望まれるのは、軍事闘争時代の執行部から、新しい世代への人心一新であろう。

世論調査を見ると、有権者の主たる関心は経済(生活)問題と一般犯罪の増加による治安情勢の悪化の二点である。また有権者の投票行動を見ると、大ざっぱに言うと相対的に教育程度、所得水準の高い首都圏の都市住民ほど、FMLN支持が多い(例えばサンサルバドル市長のエクトル・シルバはFMLN党员で人気が高く、今年3月の選挙で再選した)。逆に地方の貧困地区ほどARENA支持の傾向が強い。

急激な市場経済の導入により、貧富の格差は確実に拡大し、特に貧困層の生活水準はマクロ経済の成長とは対照的に、むしろ悪化さえしている。貧困層は全人口の60%弱でそのうち最低限の生計を維持できない極貧層は20%を占めている(もっともエルサルバドルの場合、海外からの送金が多いので、実際はこれほどではない)。治安の悪化も深刻で、殺人事件の発生率はラテンアメリカでも最高レベルである。大多数の有権者の関心は、内戦はこりごりで、二度と繰り返したくない、人権など生きていく上で最低限の権利を保障されたい、その上で経済状況を何とか良くして欲しい、犯罪を減らして安心して暮らしたい、ということであろう。

エルサルバドルの政治情勢は、このような国民の願いをとり込むべく、かつての極右ARENAとかつての極左FMLNの二大政党が競り合っているのが現状である。そして中間政党の退潮が著しい。国会では軍事政権時代の与党だった右派政党国民協和党(PCN)が第3党についている。しかし中間政党が敗退するというこの現象は必ずしもエルサルバドルに限ったことではない。それは次に見るグアテマラにも当てはまることである。

- 5 \* 紛争後のエルサルバドルの政治変動については、拙稿「エルサルバドル：和解による紛争解決の事例」(石井章編『冷戦後の中米——紛争から和平へ——』アジア経済研究所 1995年) 43~69ページ。

### 3 グアテマラの現状

グアテマラでは1996年12月に最終和平合意が成立した。これにより36年間にわたる政府軍と反政府左派ゲリラ組織、グアテマラ民族革命連合(URNG)の戦闘状態に終止符が打たれた。URNGの勢力は、同様に左派武装ゲリラであったニカラグアのFSLNやエルサルバドルのFMLNと比較するとかなり小規模である。ゲリラとしての実働部隊は1000人程度だったとする見方もある。99年の総選挙には初めて、合法政党となったURNGが参加し、国際社会は有権者の支持がどのくらいあるのか、その「実力」に注目した。本節では主に近年の選挙結果について検討するが、その前に、80年代からの政治情勢の一連の流れを簡単に振り返っておくことにしたい。

グアテマラでは1985年に、共産党の合法化、人権オンブズマンと独立した選挙管理委員会の設立など、一連の民主化措置を盛り込んだ新憲法草案を策定し、同年12月の大統領選挙で中間政党キリスト教民主党(DC)のビニシオ・セレンが選出さ

れた。セレン大統領は87年8月の歴史的な中米和平合意のホスト役を務めるなど、外交面では華々しく活躍した。しかし内政面では隠然たる影響力を保持する軍のクーデター未遂事件を引き起こし、経済面では政権末期に自国通貨ケツアルの変動相場制(事実上の切り下げ)への移行に追い込まれ、国民の支持は急減した。エルサルバドルのPDCと同様、DCはこの後内部分裂し、政党としての組織基盤を著しく弱体化させた。

1990年の大統領選挙では、右派政党連帯行動運動(MAS)のホルヘ・セラーノが当選した。ところが93年セラーノはペルーのフジモリをまねた自主クーデターに失敗し、失脚した。同年6月、国会は人権擁護監視官だったラミロ・デ・レオン・カルピオを大統領に選出した。その後96年1月、大統領決選投票が行なわれ、前グアテマラ市長で都市型の保守政党国民進歩党(PAN)のアルバロ・アルスがグアテマラ共和戦線(FRG)の対立候補のアルフォンソ・ポルティージョを僅差で破り当選した。

ポルティージョは1999年12月の大統領決選投票で、PANのオスカル・ベルシェを破り、2000年1月大統領に就任した。FRGは対ゲリラ戦の強硬派として知られ、人権侵害問題でも悪名高いリオス・モント退役将軍が1989年に創設した政党である。リオス・モントはポルティージョ政権の発足を受けて、国会議長に選出された。注目を集めたURNGは中道左派の小政党と連合して新国家連合(ANN)と名称を変更して参加した。ANNは総議席数113の国会議員選挙で8議席、総数321の市長選挙で13市、第一回大統領選挙で12%強の得票率であった。ちなみに国会議員の議席数ではFRGが65、PANが36である。かくしてグアテマラではこの二つの保守右派政党が、事実上国政を二分することとなった。

以上、グアテマラの近年の政治情勢の動きをこ

く簡単にスケッチしたが、ここで注目したいのは、左派勢力ANNの初の選挙結果をどう評価するかということである。この点については、エルサルバドルのデータと比較すると、かなりはっきりする。明らかに旧ゲリラ勢力への有権者の支持は、限定されたものであると言わざるを得ない。グアテマラでは1995年に、労働組合、農民運動、人権団体などの反政府勢力が中心となって、左派政党新グアテマラ民主戦線 (FDNG) が設立され、同年11月の国会議員選挙で6議席を獲得した。FDNGは99年選挙では全議席を失い、大統領選挙でも得票率は1%強に止まっている。

1999年の選挙結果(第一回大統領選)をもう少し詳細に分析すると、次のような特徴が浮かび上がる。先住民の比率が相対的に高く、またURNGの活動が活発で、軍の人権弾圧の犠牲者の多かったとされる、ウエウエテナンゴ、エル・キチエ、ペテンなどの県では、ANNはそこそこ善戦していて、全国平均を上回る得票率である。FRGはほぼ全国的に得票を伸ばしたが、首都グアテマラ市ではPANが優勢で、わずかであるが、FRGの得票を上回った。ANNの得票率は8%と低調であった。

グアテマラの場合留意しなければならないことは、先住民人口の比率が60%と高いことである。小泉潤二氏がウエウエテナンゴの村落で行なった、投票所ごとの先住民の選挙行動に関する詳細なフィールド調査では、大統領と市長の所属政党の支持傾向には一貫性はなく、むしろ乖離している(投票した大統領候補と市長候補は別政党)場合が多いとのことである\*6。現地では「選挙」は通常市長選を意味していて、国家観念の希薄な先住民共同体では、大統領選挙への関心はあまり強くはないと推論している。また国連の統計では人口の60%弱が貧困層に分類されているが、その多くは先住民である。彼らの生活を向上させ、いかにアピールす

るかは、グアテマラの既成政党の大きな課題であろう\*7。

\*6 詳細は、Koizumi, Junji, "Ethnicity and the Nation-State in Huehuetenango, Guatemala: The Election Results and the Problem of 'Communitarianism'," (Paper presented at the Conference, "Nation-State, Ethnicity and Democracy in Latin America" at the Japan Center for Area Studies, the National Museum of Ethnology, January 18, 2000).

\*7 最近のグアテマラ情勢を紹介するものとして、新川志保子「グアテマラ最新情報——FRG・ポルティージョ新政権——」(『そんりさ』Vol.56 2000年2月) 17~20ページ。

#### 4 ニカラグアの現状

内戦の惨禍に置かれた中米諸国のなかでも、ニカラグアは特殊な例である。1979年に社会主義を標榜するサンディニスタ民族解放戦線(FSLN)政権が成立した。そしてこれに米国が敵対し、代理戦争の色彩の濃い内戦が繰り広げられたからである。選挙の実施と民主化、それを強引に押し進めた米国の対中米外交の思惑、といった国際社会の注目したテーマが凝縮された形で具体化したのが、90年2月の大統領、国会議員、地方議員を選出する総選挙であった。

1990年選挙に関してはすでに多くの研究がある\*8。選挙の背景、結果の詳細な分析などはそちらに譲ることにしたい。本稿では武装革命により政権の座にあったFSLNが、選挙戦で予想外の敗北を期し、親米路線のビオレタ・チャモロ政権が発足したことを確認すれば十分であろう。国際社会は、軍と合体した政党であるFSLNがどのような形で民主化の流れに則していくかに注目した。民主化の定着を計るひとつのメルクマールになったのが、次に述べる96年の選挙であった。

チャモロ政権は6年間の任期を何とか終えて、1996年10月に総選挙(大統領、国会議員、地方議員)を実施した。チャモロ政権時代の与党である野党連合(UNO)は、政権末期には事実上瓦解していた。この間首都マナグア市の前市長アルノルド・アレマンは、選挙に勝つための数合わせの右派政党の連合体である、民主連合(AL)を結成し(その後内部分裂して立憲民主党:PLCとなる)、選挙は事実上FSLNのダニエル・オルテガ前大統領とアレマンの両候補の一騎打ちとなった。選挙戦中はオルテガはかなり善戦していた模様で、世論調査による両候補の支持率は伯仲したものだ。ところが保守派はこれに危機感を持ち、オバンド・イ・ブラボ枢機卿がアレマン候補と一緒にミサに参加する模様を大きく取り上げた新聞が投票日に発行されるなど、最終局面でかなり露骨な干渉もあった。結局アレマンは得票率で14ポイントの差をつけて、競り勝ったのである。

なお国会議員では議席総数93のうち、与党PLCは38、FMLNは36、初登場のニカラグアキリスト教の道(PCCN)が4議席で、その他の10政党が残りの議席を分け合っている。アレマン大統領は弁護士出身で、革命政権時代は強硬な反政府主義者として知られ、彼の属するPLCは右派政党と位置づけられている。実際1996年の選挙戦では、マイアミに亡命しているキューバ人の右翼団体から選挙資金を受け取っている。地方議員選挙では、ALは145議席のうち94議席を獲得した。ちなみに選挙法が改定され、従来市長は地方議員の互選により選出されていたが、96年選挙から市長は直接投票により選出されることになった。

ニカラグアの選挙の特徴は、政党の数と立候補者が多いことで、登録政党は35、大統領候補23人、国会議員候補は854人にのぼっている。このため投票用紙の長さは1メートル弱に達した。多党化現

象は昔からの傾向でもある。その理由のひとつは、落選した大統領候補は、投票総数の1.1%以上の得票があると、自動的に国会議員の有資格者となる規定があり、これを最大限に利用しようとする思惑である。また党のナンバー・ツーにいるよりも、党首である方がマスコミの扱いなど何かと有利とする判断がある。このように、FSLNを除くと、組織的な政党活動よりも、個人的な政治活動の延長線上に、政党を位置づける傾向も強い。

注目しておきたいのは、下野したとはいえ野党第一党としてかなりの政治的な影響力を持ち続けるFSLN党の粘り強さ、現実主義、組織力である。武力闘争を経ていったん政権の座についた元武装ゲリラ組織が、選挙に破れた後も有力政党として存命し続けたという例は、ニカラグアを措いて他にはないであろう。サンディニスタ革命が提起した、貧困の撲滅、教育と公衆衛生・医療の改革などは、依然として国民の無視できない数の層の重要な関心事である。対照的に与党は数合わせのための集合と離散を続けていて、一貫した主義・主張を明示しているとは言い難い。国民は右派=保守勢力の経済力、対米協調路線に期待して投票しているのが実情ではないだろうか。

実際中米諸国の中でもニカラグアの経済情勢はかなり悪化していて、国連の人間開発指標では、リストされている130カ国の内、上から126位(下から4番目)という劣悪な状況である。しかも1998年11月のハリケーン・ミッチによる被害額は2億4000万ドルに達し、この影響はこれから数年間は続くと思われる。もしFSLNが過去の負の遺産を払拭し、党幹部の人事を刷新することに成功すれば、政権に再び返り咲く可能性はある。

\* 8 チャモロ政権時代の政治情勢を手際よく分析したものとして、Close, David, *Nicaragua: The Chamorro Years*, Boulder, Lynne Rienner, 1999.



## 結びに代えて

紛争後の中米の民主化の動きは、地域紛争を当事者同士の話し合いで解決した事例として、地球上の他の紛争のケースと比較すれば、おそらく順調に推移しているといつて過言ではないだろう。特に自由かつ公正な選挙の実施と、それによる左派陣営への政権委譲の可能性は、ここで取り上げた3カ国では、かなり高い確率で存在する。3カ国に共通する現象としてまず、不正選挙は行なわれていないこと、中間政党が欠如していること、概して右派政党よりも左派政党のほうがよりまともがよいこと、政治家の世代交代の成否が、選挙戦を見る上のひとつの鍵となること、首都の市長職が大統領候補への有力ポストとなっていること、さらに経済面では所得格差と貧困層は拡大していること、などであろう。

さて本稿の冒頭部分で紹介した、民主主義の定着を巡る論争に則して見ると、3カ国の事例はどのような特徴を有しているのだろうか。民主主義の定着を「欧米型」のモデルと同一視するのならば、現状はそれとはかなり乖離したものと言えそうである。というのは民主主義を担う基盤となるべき中間政党が影をひそめているからである\*9。既存

のこれら諸政党は選挙に出ても、ほとんど支持を得られない。

いっぽう左右両党の、党綱領を見ると相当に近似してきている。要するにイデオロギーそのものが希薄化している。そうすると中間政党の存在基盤は弱まり、頼りがいのある強いイメージがあり、熱心な活動家が支える組織力に勝る政党に支持が集まる。さらに国民が何を求めているのか、という視点に立つと、まず内戦はもうこりごりで繰り返したくない、人権の尊重をはじめ最低限の社会的な正義を実現してもらいたい、一般犯罪の取り締まり、そして生活の向上、ということではなからうか。これらの期待に、具体的な解決策や成果を提示できる政党に国民の支持が集まるのではなからうか。中米の政治情勢はここ当分、左右に大きく振幅しながら、成熟していくプロセスを辿るのではないかと思われる。

\*9 民主主義の定着に中間政党が果たす役割を、中米の枠組みで論じたものに、Barnes, William A., "Incomplete Democracy in Central America: Polarization and Voter Turnout in Nicaragua and El Salvador," *Journal of Inter-American Studies and World Affairs*, Vol.40, No.3, Fall 1998, pp.63-101.

(たなか・たかし/中部大学助教授)